

戲書

たわむ
戯れに書す
蘇軾

元符三年（一一〇〇）六十五歳 海南島 儋州での作。

- 1 五言七言正兒戲
五言七言正に兒戲
- 2 三行兩行亦偶爾
三行 兩行 亦た偶爾
- 3 我性不飲只解醉
我が性 飲まず 只酔うを解す
- 4 正如春風弄群卉
正に春風の 群卉を 弄ぶが如し
- 5 四十年來同幻事
四十年来 幻事と同じ
- 6 老去何須別愚智
老い去りて 何ぞ愚と智を別つを須いん
- 7 古人不住亦不滅
古人住まらず 亦た滅せず
- 8 我今不作亦不止
我今作さず 亦た止まず
- 9 寄語悠悠世上人
語を寄す 悠悠 世上の人
- 10 浪生浪死一埃塵
浪りに生き 浪りに死す 一えに埃塵
- 11 洗墨無池筆無冢
墨を洗うに 池 無く 筆に冢無し
- 12 聊爾作戲悅我神
聊爾戯れを作して 我が神を悦ばしむるのみ

【解釈】 偶爾：偶然に。 たまたま。

【解釈】

五言・七言の詩は、子供の遊び。二行・三行の文は、たまたま浮かんだもの。我が性は酒飲まずとも、よく酔える。春風が花々をなぶるような心地。四十年は夢まぼろしの間、老いては、賢も愚もない。古人は、この世にいたくとも、消滅はしない。我は病むでもなければ病まぬでもない。あくせくした世の人に、ちよつとも申す。生きるの死ぬのとつまりは塵ほこりだ。墨を洗うに池もなく、筆に柄もない。まあ、こんな歌を作って自己満足じゃ。

蘇東坡一〇〇選 石川忠久より抄出